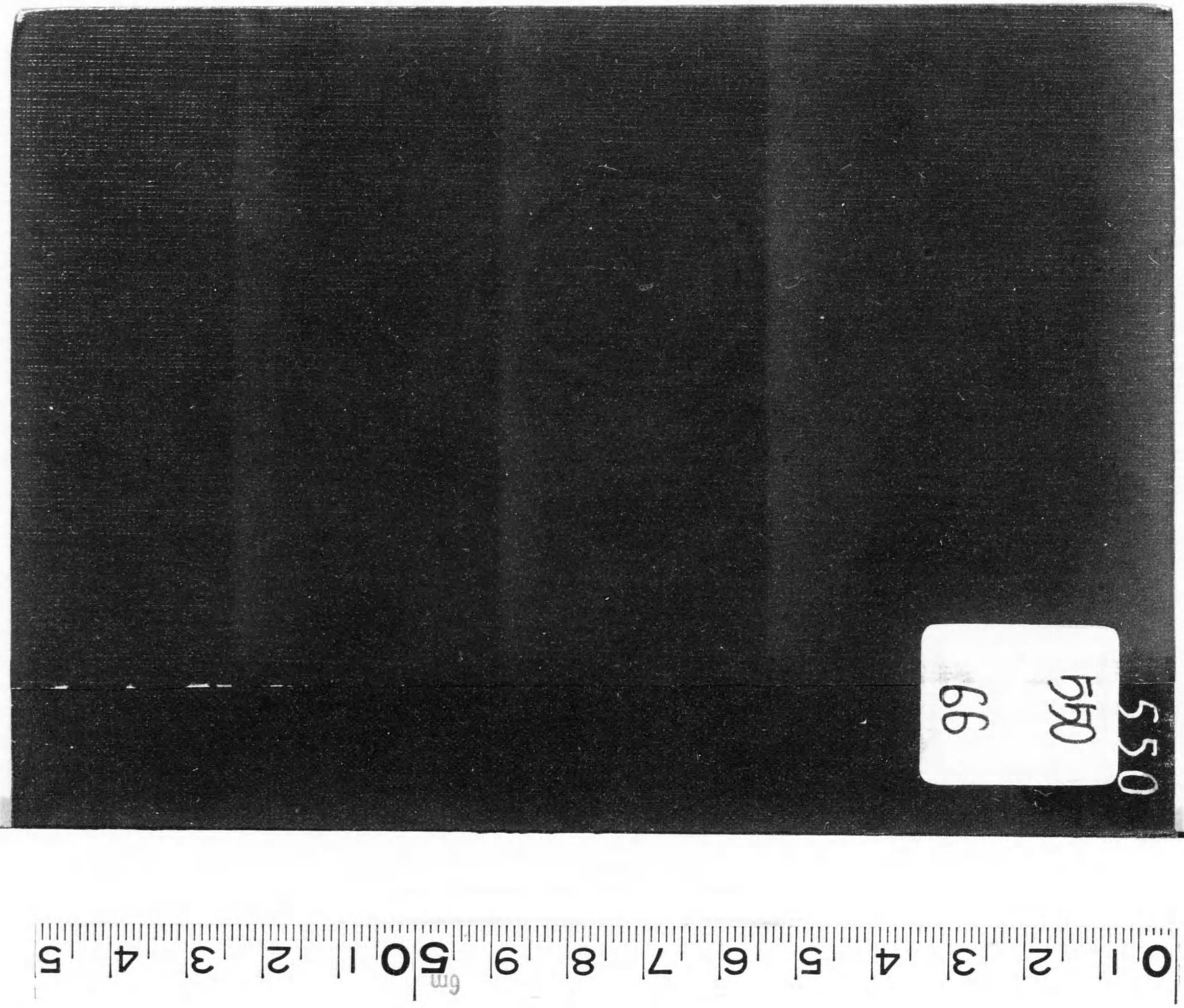

550
550
66

32. 8. 22

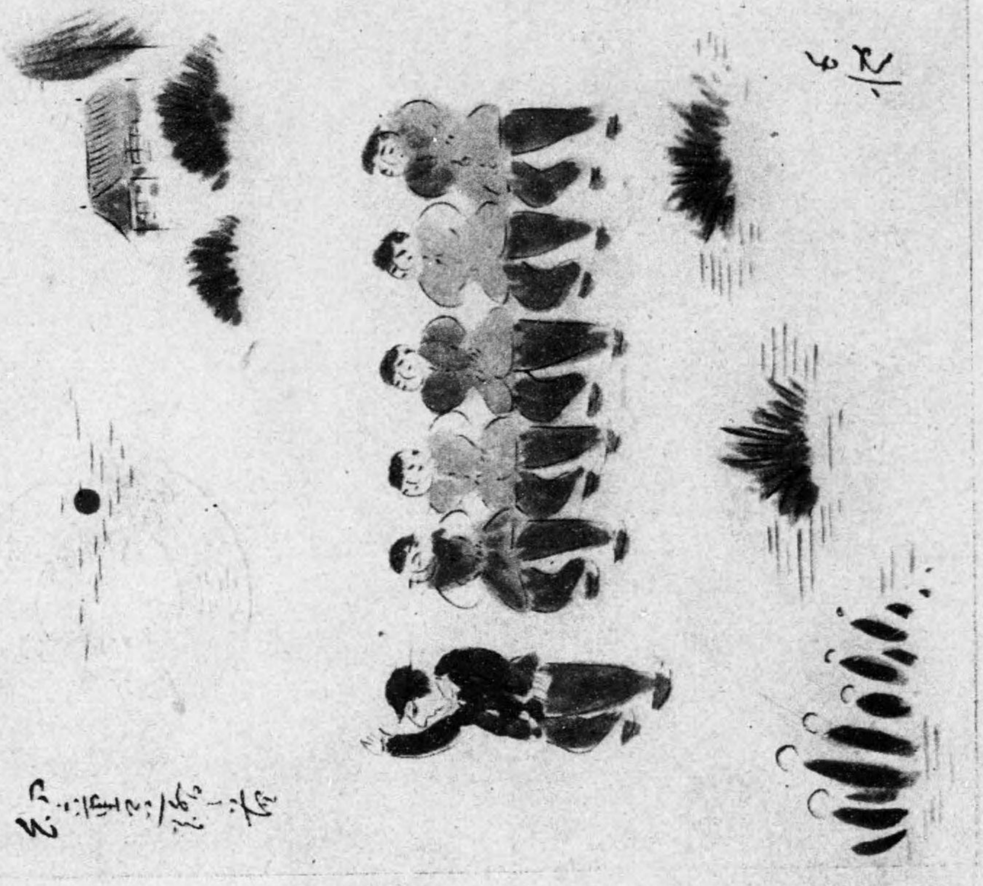
コ 8 5 1

童謡詩人叢書
—1—

花のちたらか

北原白秋著

1926
大正
新潮社版
15.6.24
内交



小序

童謠も詩であらねばならぬ。ただ童心童語の歌謠體としての特殊の表現を必要とする。新童謠運動の精進は詩の香氣高い現代の童謠を興すにあつた。童謠隆盛の今日、この眞精神が漸くその作者たちの間にも忘れられやうとしてゐる。眞贋相亂れたからである。

童謠をまた詩以下とし低劣とし、作るに容易なりと見る向も多い。これは自己の詩をすら未だ成し得ぬ初心者によつてあまりに瀆されつつある故もある。また詩人ならぬ教育家の俗惡な餘技にも禍してゐる。童語なるが故に徒に幼しとする詩壇人の悔りはその本來を謬つてゐる。

童謠を生む心こそは高く、作る事こそは至難であるとさへ思はれる。境涯に徹しての童心、詩歌の苦業道を經ての單純化で

なければならないからである。

私は既に千に近い童謡を作つた。然し深く自ら省みて恥づる。童謡は詩としての究竟道であるか。

この自選童謡集『からたちの花』は、ただ私自身の童謡の中でもやや高級に屬するものを多く選んだ。その故はこれらと私の他の詩歌との間に如何なる價値の懸隔ありやを見てほしかつたからである。また二三の例外はあるが主として靜的な風體のものを收めた。私の童謡に對する世の見解が常に動的のものにのみ向けられる苦笑を幾分でも拂ひたいからである。要するに反面は全體でない。而もまたこの集の童謡は私の作のほんの一部に過ぎない。同傾向のものにあつてもつとめて多くを殘して單にその一二をのみ採錄したからである。

終りに、この集の中により稚き者の歌ふものとしての童謡が少いからと云つて、私の童謡の凡てがこの種のもののみである

といふ風に速斷してほしくない。それらは更に多量に創作してある。で、これまでの私の童謡の全作を知らうとする人は個々の繪入童謡集或は綜合集を讀んでほしい。選鈔したこの集の童謡も、必ずしもまた、私の作中での優れたものばかりを選んだといふ譯でもない。自選はその時の心の向き次第でやつて、却つて氣樂なものである。明日には明日の日和がある。

大正十五年二月

小田原天神山にて

白秋識

目次

日なたの薔薇
薔　薇……四
アイヌの子……六
あしびの花……八
夜　中……一〇
さざなみ……一二
足　踏……一四
ほういほうい……一六
青　い　魚……一八
酸模の咲くころ……二〇

藤の實……一三
落葉……一四
おたまじやくし……一六
からまつ原……一八
お月夜……二〇
海の臺場……二二
鷗の塔……二六
鳥追……二九

からたちの花

からたちの花……三四
すずらん……三六
たんぽぽ……三八

お窓のそと……五〇
春まで……五二
夏の小川……五四
鷹……五六
お月さま……五八
ペチカ……六〇
雀追ひ……六二

月夜の蝶

月夜の蝶……六八
鶉……七〇
雨の樋……七一
お床の置物……七二

父さん母さん……七四
お米の七粒……七六

芥子粒夫人

芥子粒夫人……七八
象の子……九一
フランシス上人と雀……九五
アントニオ上人と魚たち……九四
ぐるぐる廻り……九六
日永……九九
紅い蝶々白蝶々……一〇一

葡萄の蔓

虎の煙草……一〇四
竹取の翁……一〇六
郵便くばり……一〇九
雨のあと……一一三
雨の田……一一四
紅借り白鷺……一一六
寄り道……一一八
合歡……一二〇
かやの木山の……一二二
砂山……一二四
わらび……一二六
葡萄の蔓……一二八

朱欒の花

南の風の……一三三
お晝寢……一三四
ねんねの騎兵……一三六
げんげ草……一三八
こんこん小山……一四〇
蝶蝶の旅……一四二
吹雪の晩……一四六
りんりん林檎の……一四八
朝……一五一
昨夜のお客さま……一五三
雀のお宿……一五四

鷄爺さん……一五六
魔法つかひ……一五九
和蘭陀船……一六四
陽炎……一六九
お月見……一七〇
小鳥の歌ひ手……一七三

ちんちん千鳥

赤い鳥小鳥……一七八
ほうほう螢……一八〇
雪のふる晩……一八二
あわて床屋……一八四
葉つばつば……一八八

仔馬の道ぐさ……一九〇
ちんちん千鳥……一九二
九十九島……一九四

からたちの花

北原白秋

日(ひ)なたの薔薇(ばら)

薔薇

薔薇は薄紅いろ
なかほどあかい。
重ね花びら
ふんわりしてる。

薔薇は日向に
お夢を見てる。

蟻はへりから
のぞいて見てる。

薔薇の花びら
そとがはひかる。
なかへ、その影
うつして、寝てる。

アイヌの子

大豆畠の
露くさは
露に濡れ濡れ
かはいいな。

大豆畠の
ほそ道を、

ちさいアイヌの
子がひとり。

いろはにほへと
ちりぬるを。
唐黍たべたべ、
おぼえてく。

あしびの花

あしびの花は白い花、
鈴なりの房、小さい房。

あしびの花の咲く頃は、
山椒の魚もうまれます。

箱根、蘆の湖、塔ケ島、

白い離宮の夜あけがた。

白いあしびの花折りに
白いボートを漕ぎながら。

小さい宮さまおいでだと
わたしの父さん云ひました。

夜中

おうちの寢間で
わたしは寢てた。
あかりが點いて
人ごゑしてた。

見知らぬ部屋に
わたしは寢てる。
あかりが點いて

人ごゑしてる。

どこだか知らぬ、
誰だか知らぬ。
あかりが點いて
人ごゑしてる。

さざなみ

ささなみよ、
銀のささなみ。

ちらちらと、
つづくささなみ。

ささなみの
ひかる方から。

ほら、見てる、
みんな魚だ。

笑ってる、
目が光ってる。

青い空、
遠い沖から、

とんととと
音もしてゐる。

足踏

足踏してゐる、
僕たちは。

空にはながれる、
よい雲が。

海にはさざなみ、
ちらちらだ

學校の外庭
ひとまはり。

まはつて、足踏、
僕たちは。

山茶花咲け咲け、
鐘が鳴る。

ほういほうい

ほういほういと呼んでます。
誰か埠頭に呼んでます。

ほそい月出る
眞夜なかに

お目々あいてる
子はないか。

雲のきれめのすぐそこに
青い四角な燈をつけた
二本マストが泊つてる。

青い魚

青い魚が呼んでます。
紅い魚が呼んでます。

今夜のお月さん、
十五夜さん、

お池の夕飯、
めしあがれ。

香爐もほんのり
煙しましょ。

酸模の咲くころ

土手のすかんぽ、
ジャワ更紗。

晝は螢が
ねんねする。

僕ら小學、
尋常科。

今朝も通つて、
またもどる。

すかんぽ、すかんぽ。
川のふち。

夏が來た、來た、
ドレ、ミ、ファ、ソ。

藤の實

お目々さめればよその庭、
昨夜お客に來たお家、
母さま、母さま、あら、雨よ。

雨は霧雨、秋の雨、
お顏洗つて、手々拭いて、
母さま、母さま、あれはなに。

あれは藤の實、藤の棚、
うちのささげによく似てやう
嬢やよ嬢やよ、搖れてませう。

春の祭に來たときは
白と紫、ながい房、
今は莢の實、雨ばかり。

落葉

落葉だ、落葉だ、
火のやうだ。
この丘、あの丘、野は遠い。
きいてろ、きいてろ、
角笛だ。

乗せてけ、乗せてけ、
空馬車だ。
革鞭、ふりふり、そりや駈けた。
ぴいぷう、ぴいぷう、
夕焼だ。

おたまじやくし

おたまじやくしを食べに來る
鷺は淺間の巣立鷺。

おたまじやくしの尾が切れりや
ぢきに蛙になりましよか。

澤の氷もとけました。
芹もあをあを萠えました。

つくしんぼうや、つくしんぼう、
丘に誰かが呼んでます。

からまつ原

からまつ原の
ちらちら薄日。

かばんをかけた
子供が通る。

泣きたいやうな
さみしい春だ。

どこかで、鳥が
ちつちと鳴いた。

お月夜

トン、
トン、
トン、
あけてください。
どなたです。
わたしや木の葉よ。
トン、コトリ。

トン、
トン、
トン、
あけてください。
どなたです。
わたしや風です。
トン、コトリ。

トン、
トン、
トン、

あけてください。
どなたです。
月のかげです。
トン、コトリ。

海の臺場

海の臺場に
萠えたよ、草が。
春が來ました、
來ました、沖に。
壞れ臺場に
さします、潮が。

波がぶつかる、
ぶつかる、岩に。

空にひら〳〵、
飛びます、鳥が。
あれはかもめだ、
かもめだ、白い。

海の臺場の
つくつくぼうし、
とりにゆきませう、

ゆきませう、とりに。

海の臺場に
萠えたよ、草が。
春が來ました、
來ました、沖に。

鷗の塔

鷗の塔は
波のうへ、
葡萄ねずみの
空のうち。

鷗の塔は
白い塔、
舞うてあつまる

翅の塔。

鷗の塔は
沖の塔、
建てて、くづれて、
また建てて。

鷗の塔は
波のうへ
葡萄ねずみの
空のうち。

鷗の聲は
風のした。
おぎやを、おぎやをで
月が出る。

鳥追

ほういほういのほうじやり棒、
さつさ追ひましよ、田ん鳥を。
松笠ぱちぱち燃してやれ。
ほういほうい。

葭原雀は葭の中、
さつさ追ひ越せ、へら鷺を。
夜明の明星もちろめいた。

ほういほうい。

雉子のめん鳥、霜夜鳥、
さつさ追ひ出せ、柴鳥も。
それでも立たなきやおん婆よべ。
ほういほうい。

向う洲の崎、鳥ゐぬか、
さつさ追へぬか、萱無いか。
牛でも馬でもぞろ引いて來い。
ほういほうい。

こちの苗代、八つ畷、
さつさ追へ追へ、立ち鳥を、
えいや、田の神の鳥追ひだ。
ほういほうい。

ほういほういのほうじやり棒、
さつさ追ひましよ、田ん鳥を。
千羽も萬羽も立ちあがれ。
ほういほうい。

からだたちの花

からたちの花

からたちの花が咲いたよ。
白い白い花が咲いたよ。

からたちのとげはいたいよ。
青い青い針のとげだよ。

からたちの畑の垣根よ。
いつもいつもとほる道だよ。

からたちも秋はみのるよ。
まろいまろい金のたまだよ。

からたちのそばで泣いたよ。
みんなみんなやさしかつたよ。

からたちの花が咲いたよ。
白い白い花が咲いたよ。

すずらん

すずらん、すずらん、
しろいすず。
すずらん、すずらん。
やまのはな。
すずらん、すずらん、
もやのなか。

すずらん、すずらん、
ひがくれる。
すずらん、すずらん、
すずがなる。
すずらん、すずらん、
つきがでる。

たんぽぽ

沼の田べりのたんぽぽは、
たんぽぽは、
咲けば、さぶりと、
波が來る。

たんぽぽ。たんぽぽ。
波が來る。

沼の田べりのたんぽぽよ。
たんぽぽよ。
咲けば、子どもが、
舟で來る。

たんぽぽ。たんぽぽ。
舟で來る。

お窓のそと

お窓のそとには芙蓉が咲いて、
誰でしよ、誰でしよ、お帽子が出てる。

いつまでたつてもあちらを向いて、
誰でしよ、誰でしよ、寄つかかつてゐます。

小さなおこゑで、リボンが揺れて、

誰でしよ、誰でしよ、本讀んでゐます。

お眼々をふさごか、お帽子をとろか。
誰でしよ、誰でしよ、まだ讀んでゐます。

お窓のそとには芙蓉が咲いて、
誰でしよ、誰でしよ、寄つかかつてゐます。

春まで

子供

鳥網張りには夜が明けて、
鈴鴨うつのは日が暮れて、
晝間は父さん草鞋うち、
母さん、正月いつ來ます。

母親

鳥網張つたら、鳥舍かけて、
鈴鴨うつたら、餅ついて、
みんなのお足袋も編みあげて、
坊やよ、正月ぢき來ます。

夏の小川

小川はごきげん、よい天氣、
ちよろちよろ笑つて走ります。
坊つちやんお早う、今日は。
山ではかやの實生りました。
こちらのいが栗まだ青い。
坊つちやん泳ぎにゆきますか。
菱の實さがしに來ませぬか。

やれやれ、わたしはいそがしい。
もひとつ、お里のみづぐるま、
くるくる廻して、粉挽いて、
それから海へとまゐりましよ。
一あしお先きに行つてますよ。
そろそろ裸で出ておいで。
麥稈帽と手拭忘れずに。

鷹

鷹だ、鷹だ、そりや見えた。
ほらほら、飛んでる。親鷹だ。
向うお山の白樺に、
ほらほら、とまつた。親鷹だ。

鷹だ、鷹だ。そりや來たぞ。
ほらほら、翔つた、隼だ。

何か見つけた。溪間だ。
ほらほら、ねらつた。親鷹だ。

子の鷹、子の鷹、どこにゐる。
ほらほら、嵐だ、山鳴だ。
溪に砂金が光つたぞ。
ほらほら、風切る、親鷹だ。

お月さま

お月さまいくつ。
十三七つ。
七つの海を、
朝から越えて、
南のはてで、

闇の夜になつて、
ちつちやいペンギン鳥が、
氷の原を、
あつちの星や青いぞ、
こつちの星や赤いぞ。

ペチカ

雪のふる夜はたのしいペチカ。
ペチカ燃えろよ。お話しましよ。
むかしむかしよ。
燃えろよ、ペチカ。

雪のふる夜はたのしいペチカ。
ペチカ燃えろよ。おもては寒い。
栗や栗やと

呼びます。ペチカ。

雪のふる夜はたのしいペチカ。
ペチカ燃えろよ。ぢき春來ます。
いまに楊も
萠えましよ。ペチカ。

雪のふる夜はたのしいペチカ。
ペチカ燃えろよ。誰だか來ます。
お客さまでしよ、
うれしいペチカ。

雪のふる夜はたのしいペチカ。
ペチカ燃えろよ。お話しましよ。
火の粉ばちばち、
はねろよ、ペチカ。

この童謡は南滿教育會用として作つたものの一つです。ペチカとはロシヤ式煖爐のことです。

雀追ひ

山椒太夫　その二

安壽こひしや。ほうやれほ。
厨子王こひしや。ほうやれほ。
ここは荒海、佐渡ケ島
雜太の庄の里はづれ。

安壽こひしや。ほうやれほ。
厨子王こひしや。ほうやれほ。

二人が母さま、ぼろぎもの、
めんめめくらで、竿もつて。

安壽こひしや、ほうやれほ。
厨子王こひしや。ほうやれほ。
追つても追つてもむら雀、
干した席の粟のうへ。

安壽こひしや。ほうやれほ。
厨子王こひしや、ほうやれほ。
遠い薄日にほうやれほ、

雀追ひ追ひ、ほうやれほ。

解

さんざんにこきつかはれた安壽と厨子王はおしまひに山椒太夫のところを逃げ出すのですが、姉は弟を逃がすため川へ身を投げて死に、厨子王はやつとある坊さんから助けられて、それから都にのぼります。後に丹後の國守になつたとき、お母さまをたづねて佐渡ケ島へわたると、お母さまはかうして雀追ひをしてゐらつしやるのです。厨子王はそれをお母さまとは知らなかつたのですが「厨子王こひしや、ほうやれほ。」といふのをきいて、もうたまらなくなつて飛んで

行ってかぢりつく。めくらのお母さまも驚いてじつと見つめてゐるうちに不思議に眼があいたそれが厨子王だと知れると思はず抱き合つて二人でおいおい泣いてしまふのです。これが山椒太夫の後のお話。

月夜の蝶

月夜の蝶

月夜の蝶蝶の飛ぶ姿。
坊やは、知るまい、まだ見まい、
野良路、畔路、宵のくち、
すぐにも芝草しめります。
蝶蝶のお翅は雪のやう、
ひらひら田圃をわたります。

月夜は晝よりまだ青い、
鵲豆、隠元、みな白い。
蝶蝶は搖れます、上ります。
お夢の空へとのぼります。
乾草小屋よりまだ高く、
太白星よりまだ高く。
坊やもねんねよ、おねむりよ、
蝶蝶のお翅に乘せてあぎよ。

鶉

坊やよ、鶉が啼いてゐた。
粟穂の粟穂の畔の奥。
月夜は遠いと啼いてゐた。
見えても遠いと啼いてゐた。

雨の樋

とんとと鳴らせよ、雨の樋、
坊やがねんねの枕もと。
とんとと鳴らして、また明けりや、
二重のお虹も屋根の上。
とんとと鳴らせよ、雨の樋。
坊やがお目ざの枕もと。
とんとと鳴らせよ。
とんとと鳴らせよ。

お床の置物

坊やよ、おききよ、おぼえとき、
父さん貧しいその時は
雀が啼いてもお米無い。
お床の置物、もらひもの、
紅いトマトに青胡瓜、

花瓶無ければ壺も無い。
徳利に唐黍、黍の出穂。
お縁に擂鉢、野良の花。
お筆をねぶつちや歌つてた。
お空をながめちや歌つてた。

父さん母さん

坊やよ、坊やよ、ようおきき、
父さんさびしいその時は
雀といつでもあそんでた。
雀の親子が啼く時は、
朝から父さん思つてた。
（それは坊やのお祖父さまだ）
暮れては母さん思つてた。
（それは坊やの祖母さまだ）

父さん母さん遠かつた。
（お祖父さんお祖母さん遠かつた）
貧しい貧しいあばら家、
それでも子どもが、時どきは、
紅い蓮華を折つて來た。
白い蓮華を持つて來た。

お米の七粒

坊やよ、おききよ、おぼえとき、
父さん貧しいその時は、
お米が七粒、錢は無い。
一羽の雀に粒一つ、
七羽の雀に粒七つ、
雀は啼き啼き食べてゐた。
父さん雀と遊んでた。

芥子粒夫人

芥子粒夫人

1

「綺麗な綺麗なちび鼠、
おまへにお話さしてあぎよ。」
魔法つかひは呪文をとなへ、
さあさあお食べよ、米の粒。

魔法つかひとちび鼠、
お話しいしい暮らしてた。

ガンヂス河の堤の上の、
棕梠葉のお小屋のむしろ小屋。

それもしばらくちび鼠、
悲しくなつたで、ちゆうちゆうちゆう、
「變へて下され、鼠にや飽いた。」
「なにになりたい」「なににでも。」
「猫にしてやろ。」にやんにやんにやん、
猫になります、ちび鼠。

「變へて下され、猫にも飽いた。」
「なにになりたい。」「なににでも。」
「犬にしてやろ。」わんわんわん、
犬になります、三毛猫が。
「變へて下され、犬にも飽いた。」
「なにになりたい。」「なににでも。」
「猿にしてやろ。」きやつきやつ、
猿になります、むく犬が。
「變へて下され、猿にも飽いた。」

「なにになりたい。」「なににでも。」
「猪にしてやろ。」ふうふうふう、
猿が野猪に變ります。
「變へて下され、美しい人に、
ああ、ああ、野猪はいやらしい。」
そこで一と振り、魔法杖、
見れば綺麗な娘の子。
眞赤な練絹、ふさふさ黑髪、
金の腕環や髪かざり。

綺麗な綺麗なその娘、
芥子粒夫人と名がついた、
今度は樂しいお邸ずまひ、
棕梠の葉お小屋はふり棄てる。

2

王さまお馬で通られる。
花に水かけ、芥子粒夫人
「紅い果實さしあげまする、
陛下お入りなさいませ。」

「おお、美しい、ありがたう、」
王さま馬からお下りになる。
「紅い果實まだまだ食べぬ。
おまへの親たち訊いてから。」
わたしの親たちちび鼠
とは、云ひにくい。はづかしい、
「きつと女王になる人と、
魔法つかひが申します。」

「おまへの名まへは。」「はい、陛下、
芥子粒夫人と申します。」
「よしよし、おまへと結婚しましよ。」
魔法つかひも「こりや目出度う。」

3

今は御殿で女王さま、
それでも、おづおづ、芥子粒夫人、
「いまに知れたらどうなるでしよか、
わたしや嘘つき、すぐ知れよ。」

ある日、木かげに腰かけて、
お菓子たべたべ見とれてた、
眞赤な練絹、ふさふさ黒髪、
お池に映つた水鏡。

すずしい銀色、絹ヴエール、
桃いろ、紫、玉かざり。
つくづく見とれて、「まあまあ、御覽、
なんと綺麗な女王さま。」

そこへちよろちよろ、ちび鼠、

お砂糖の一かけいただこか。

「しつしつ、あつち行け、いやらしい鼠」

足でちよつと蹴る芥子粒夫人。

すると鼠はちゆうちゆうちゆう、

「おまへわたしを知らないの。」

「いえいえ、知りやせぬ、なんの知らう。」

いやな顔して女王さま。

「おまへは母さんお忘れか、

ほれほれ、お父さんも來てゐるよ。」

またも鼠がちよろちよろ出て來て、

「おおおお出世ぢや、これ娘。」

「わたしの婿さま、王さまだ。」

「おれも會ひたい、王さまに。」

「婿だ　舅姑だ、お喜びなさろ、

おまへ會はせにや、わしらゆこ。」

「あらまあ、父さん、お母さん。」

元は娘のちび鼠

「どうしようどうしよう、もう嘘知れる。」

ふらふら目まはし、池の中。

鼠の兩親こりやどうぢや、
ちゆうちゆうどうしやう、なぜ死んだ。
わけもわからず、飛んで行った、馳けた。
泣き泣きラシさん呼びに行った。

魔法つかひのラシが來りや、
王さま泣き泣きござらしやる。
「陛下、まづまことを云へば、
芥子粒夫人こそちび鼠。」

「お亡くなられた芥子粒夫人
あきらめあそばせ、仕方ない、
なにかいいことござりましよ、ござろ、
今にしあはせ、うめ合せ。」

4

とても不思議な綠の芽、
間も無くお庭に茂ります。
見る見る見事に、魂げるばかりに、
咲いたは咲いたは芥子の花。

芥子粒夫人こそ女王さま、
女王さまこそ芥子の花。
赤の練絹、生絹のヴェール、
桃いろ、紫、眞珠いろ。

とても不思議な芥子の花、
誰もはじめて芥子の花。
これが世界の芥子の先祖よ。
印度のお話、芥子粒夫人。

象の子

わたしや象の子おつとり〳〵してた。
何か知らぬがゆつくら〳〵してた。
お眼〻ふさいでうつとり〳〵してた。
お鼻ふりふりゆうらり〳〵してた。
何處か知らぬがのつそり〳〵してた。
いつか知らぬがとうろり〳〵してた。
何もしもせずぼんやり〳〵してた。

坊や
おまんまだよ。

誰か呼ぶけどうつとり〳〵してた。
お鼻ふりふりゆうらり〳〵してた。

フランシス上人と雀

かはいい雀が申すには
上人さまは、フランシスさまは、
なんとうれしい、ありがたい、
お掌々に載つても、のう雀、
お頭に載つても、のう雀、
雀、雀とおやさしい。
茅花が咲いても、のう雀、
雫がちつても、のう雀、
雀、雀とお呼びなる。

アントニオ上人と魚たち

今日はお説教、よい日和、
小さな魚たち岸の方、
中ほどの魚、そのうしろ、
大きい魚たち、そのずつとうしろ、
岸から海まで、みんなぱくぱく並んだ。

上人さまよ、上人さまよ、
アントニオさま、お救ひ主よ、
空は青空、海は凪、
なんとお面のうららかさ、
なんとお聲のおやさしさ。

ぐるぐる廻り

いかに聖フランシスはフラテ・マッセオをしてあまたたびぐるぐると回らしめ、しかしてそのちシエナに赴きしか。

（聖フランシスの小さき花）

旅のお二人、ある日のことよ、
上人さまはフランシス、
フラテ・マッセオ、その御弟子、
道は三筋の岐れ道、
一つはフイレンゼ、
一つはシエナ、

一つはアレッゾ、
「父よ、どちらへまゐりましよ。」
「ぐるぐるお廻り、そら、ここで、
神さままかせよ、みなまかせ。」

廻りはじめた、ぐるぐるぐる。
ぐるぐる廻りの目がまはり、
フラテ・マッセオふらふらふらら
それでも止まれとおつしやらぬ。
フラテ・マッセオ獨樂のよだ、
ぐるぐるぐるぐる、上人さままかせ。

「止まれ、うごくな、
さて、どつち向いた。」
「父よ、シエナに。」
「さうかさうか、シエナへさあまゐろ。」
フランシスさま、御上人、
フラテ・マツセオ、その御弟子、
空には神さま、神まかせ。

日永

卵はおつとり殻の中
雛のあたまをまろめてる。

雛のあたまはまろめられ、
お眼々をあけよと待つてゐる。

お眼々をあけよと待つ雛、
雛の親鶏、ぬくめ鶏。

雛の親鶏、ぬくめ鶏、
日向をまじまじながめてる。

紅い蝶々白蝶々

紅い牡丹に　紅蝶々、
白い牡丹に　白蝶々。

紅い蝶々が立つたらば、
白い蝶々が立つたらば、——
紅い牡丹に白蝶々、
白い牡丹に紅蝶々。

紅い蝶々が立つたらば、
白い蝶々が立つたらば、——
紅い牡丹に紅蝶々。
白い牡丹に白蝶々。

紅い蝶々がまた立つた、
白い蝶々がまた立つた。
なんだかおつかないぞ、早う逃げろ。

葡萄の蔓

虎の煙草

むかしむかしその昔、
虎が煙草を吸うたころ、
長白山から鷲が來て、
岩の根もとに牡丹が咲いて、
そこへ黄色いお服の唐子、
唐子ぽこぽこ水汲みまする。
水は清いし、深さは深し、

遠いお里で笛吹きまする。
月も出まする。夜もあけまする、
明けりや唐子の影も無い。
鷲も牡丹も、影も無い。
そこで煙草の火も消えた。
虎がわつそり欠伸した。
これでおしまひ、はい、左様なら。

註　朝鮮では昔々のことを虎が煙草を吸うた頃と云ふさうです。

竹取の翁

野山かせぎのお爺さま、
　合唱（竹取りの翁だ、竹取りの翁だ。）
いつも竹取、笹かつぎ。
　合唱（いい翁だ、いい翁だ。）

ある日、ありやりやと驚いた。
（ピカリピカリ光つた。ピカリピカリ光つた。）
竹の根方に豆の人。

（小っちやい姫だ、小っちやい姫だ。）
その子ひろうて、お爺さま、
　ほくほく歸つた、ほくほく歸つた。）
鳴くは鶯、よい日和。
（ホウ、ホケキョよ。ホウ、ホケキョよ。）

これよ婆さま、眩ゆかろ、
（家まで光るぞ。）
おお、おお、かはいい。お爺さま。
（かぐや姫だ、かぐや姫だ。）

それからしあはせ、篠の藪、
（いつ行つてもだ、いつ行つてもだ。）
竹のふしぶし、金のつぶ。
（ホウ、ホケキョよ。ホウ、ホケキョよ。）
むかしむかしのお爺さま、
（竹取りの翁だ、竹取りの翁だ。）
お伽ばなしのかぐや姫、
（それから、きかして、それから、きかして。）

郵便くばり

郵便くばりの來る頃は、
唐黍畑の入日どき、
つくつくほうしも鳴き立てる。
郵便くばりの來る影は

いつでもぽつつり、山のすそ、
帽子のひさしが光ります。

郵便くばりの來る道は、
さやさや黍の葉、紅い房、
兩手をふりふりまゐります。

郵便くばりの小父さんは
いつもの鞄で、青い鬚、
お鬚の中から笑つてる。

郵便くばりは日に一度、
唐黍畑の入日どき、
「はいはい、坊や、またあした。」

郵便くばりは待ち遠い。
つくつくほうしよ、まだ來ぬか、
誰かの手紙が來はせぬか。

雨のあと

萠黄の暈は
片われ月よ。
ほうほう螢、
しめれよ、ひとつ。

笹葉の露は
小雨ののこり。
ほうほう螢、

明れよ、ふたつ。

水車の音も
ことことと鳴るに、
ほうほう螢、
すうすうとわたれ。

螢の籠も、
青あを濡れた。
ほうほうほうよ、
ほうほうほうよ。

雨の田

蓑着て、笠着て、犁の柄押して、
しつ、しつ、しつ。

お馬はひもじうて芹の葉たべる。
しつ、しつ、しつ。

雨ふりや、蛙がげこげこわめく。
しつ、しつ、しつ。

雨やみ小やみにや、つんつん燕。
しつ、しつ、しつ。

泥田のお馬よ、あつちこつちむくな。
しつ、しつ、しつ。

それでも、隣は菜の花、げんげ。
しつ、しつ、しつ。

蓑着て、笠着て、雨ふる中を。
しつ、しつ、しつ。

紅借り白鷺

しらしら、白鷺、夜が明けた。
どちらへ早よからおいでです。
鶴さんお宿へ紅借りに。
なぜなぜ、いそいで、紅借りに。
頭がつめたい、帽子無い。
そんならこの橋おわたりな。
いえいえ、枯葦くぐりましよ。
枯葦小藪にお舟無い。

お舟が無ければ飛んで行こ。
そんなら何處へと飛んで行く。
河洲の空へと舞うて行く。
河洲の空なら時雨れます。
時雨れはしませぬ、まだ日和。
それでも朝虹立ちました。
二重の朝虹立ちました。

寄り道

寄り道、小道、
牡丹のかげに、
小母さんがござつて、
いたちつこ　いたち、
早よ家へ歸れ。

寄り道、小道、
あやめの中に、
小父さんがござつて、
いたちつこ、いたち、
早よ家へ歸れ。

合歡

ねんねん合歡の花、
燕が搖つた。

ねいろとしたれば
小ぬか雨かかつた。

ねんねん合歡の花、
水ぐるまが廻つた。

ねいろとしたれば
水玉がかかつた。

かやの木山の

かやの木山の
かやの實は、
いつかこぼれて、
ひろはれて、

山家のお婆さは
ゐろり端、
粗朶たき、柴たき、

燈つけ、

かやの實、かやの實、
それ、爆ぜた、
今夜も雨だろ、
もう寢よよ。

お猿が啼くだで、
早よお眠よ。

砂山

海は荒海、
向うは佐渡よ。
すずめ啼け啼け、もう日はくれた。
みんな呼べ呼べ、お星さま出たぞ。
暮れりや、砂山、
汐鳴りばかり、

すずめちりぢり、また風荒れる。
みんなちりぢり、もう誰も見えぬ。
かへろかへろよ、
茱萸原わけて、
すずめさよなら、さよなら、あした、
海よさよなら、さよなら、あした。

わらび

山火事燒けるな、ホウホケキヨ、
山のむじなが燒け死ぬぞ。（小田原）

蕨わらび、
いついつ萠える。
山燒き、
野燒き、
まだ火は赤い。

むじなの嫁は
いついつ來やる。
山燒き、
野燒き、
夜は火が赤い。

葡萄の蔓

葡萄の蔓は
眼のある蔓か、
わたしの窓へ
朝も晩ものびる。

葡萄の蔓よ、
何見てのびる、
日の照る硝子、

ちらちらするか。

緑の指よ、
葡萄の蔓よ、
日に日に待てば
日に日にのびる。

近寄れ早く、
葡萄の蔓よ、
ねんねの夜も
揺れ揺れのびよ。

朱欒(ザボン)の花(はな)

南の風の

南の風の吹くころは、
朱欒の花がにほひます。

朱欒の花の咲く夜さは、
空には白い天の川。

三つ星、四つ星、七つ星、
數へてゐたれば、つひ、眠むて。

つひつひ、とろりとねんねした。
そのまま朝までねんねした。

南の風の吹くころは、
朱欒の花がにほひます。

お晝寢

日向の秣に晝寢すりや、
祭の囃子がきこえます。

鉦や、太鼓や、馬の鈴、
風船玉もピイと鳴る。

覗きからくり、薄荷糖、
花火もぽんぽんあがります。

日向の秣がなつかしい、
晝寢りや祭の夢ばかり。

ねんねの騎兵

わたしのかはいい龍騎兵、
唐黍畑に晝寢して
お馬に、かぽかぽ、逃げられた。
お馬は木の馬、青の馬、
野を越え、山越え、森越えて、
湖水のふちまで來て見れば、

野鴨があちこち、雁一羽、
月夜は凍るし、宿は無し、
露西亞の獵師にすくはれて、
はるばる戻ればまだお晝、
唐黍畑のそよ風に、
涙もぽろぽろ、龍騎兵、
すやすや眠ながら泣いてゐた。

げんげ草

ねんねのお里のげんげ草、
ぽちぽち、仔牛も遊んでる。
牧場の牧場のげんげ草、
誰だか遠くで呼んでゐる。

ねんねのお里はよい田舎、
ぽつぽのお汽車で下りたなら、
野道はひとすぢ、田圃道、

藁屋に緋桃も咲いてます。

ねんねのお守はゐやせぬか、
ちよろちよろ小川もながれてる、
いつだか見たよな橋もある、
小藪のかげには閻魔堂。

ねんねのお里で泣かされて、
お背戸に出て見たげんげ草、
あのあの紅いげんげ草、
誰だか遠くで呼んでゐる。

こんこん小山

こんこん小山のお月さま、
ついたち二日はまだ小さい。
仔馬の耳より
まだ小さい。

こんこん仔馬も馬柵の中、
一飛び、二飛び、まだ小さい。

となりの兎より
まだ小さい。

こんこん小藪の青葡萄、
一つぶ、二つぶ、まだ小さい。
仔馬の眼々より
まだ小さい。

蝶蝶の旅

湖ははるばる、
空遠し。

浪はさざなみ、
日和浪。

南の風に、
おくられて。

黄や、紫や、
白の蝶、

何處へゆくのぞ、
數知れず。

すれすれわたる
今日の風。

晝は事なく

わたれども。

とまるもの無き
浪つづき。

風はひととき
目路の果。

夕立雲も
湧くものを。

どうせは、神鳴り、
いなびかり。

早よ早よ、わたれ、
夜は凄い。

蝶蝶、蝶蝶、
旅の蝶。

吹雪の晩

吹雪の晩です。夜ふけです。
どこかで夜鴨が啼いてます。
燈もチラチラ見えてます。

私は見てます。待つてます。
何だかそはそは待たれます。
内では時計も鳴つてます。

鈴です、鳴ります、きこえます。
あれあれ、橇です、もう來ます。
いえいえ、風です、吹雪です。

それでも見てます。待つてます。
何かが來るよな氣がします。
遠くで夜鴨が啼いてます。

りんりん林檎の

りんりん林檎の木の下に、
小さなお家を建てましょか。
そしたら小さな窓あけて、
窓から青空見てましょか。

りんりん林檎がなつたなら、
鶸もちらほらまゐりましよ。
丘から丘へと荷をつけて、
商人なんぞも通りましよ。

りんりん林檎に雪がふり、
一夜に眞白くつもつたら、
それこそ、かはいい煙あげて、
朝から食堂を開きましよ。

りんりん林檎は燒きましよか、

むかずに皿ごとあげましよか、
お客は誰やら知りやせぬが、
今にも見えそな旅のひと。

りんりん林檎の木の下に、
小さなお家を建てましよか、
窓から青空見てましよか、
遠くの遠くを見てましよか。

朝

蝸牛角振れ、
野茨が小風に揺れ出した。
雀もちゆんちゆく鳴いてゐる。
お乳しぼりも起きて來た。
牝牛も青草食べ出した。

昨夜のお客さま

昨夜のお客さま誰でしよ。
夜なかに人聲してゐたが、
夙よからお寢間をのぞいても、
桃色窓掛まだ暗い。

昨夜のお客さま誰でしよ。
知らない子どもか、小母さまか。
それともお髭の小父さまか。

何處からおいでか、何しにか。

昨夜のお客さま誰でしよ。
お母さんに聞いたら御存じか。
お父さんはなんにも仰つしやらぬ、
ほんとに誰も來はせぬか。

昨夜のお客さま誰でしよ。
早よ早よ知りたい、逢つて見たい。
林檎畠の紅雀、
お前は誰だか知つてか。

雀のお宿

雀のお宿は山蔭に、
小藪がこんもり、ほそながれ、
下手に丸木の橋ひとつ。

雀のおやどはもう寒い。
誰か來るかと出て見れど、
遠くぢやちりぢり渡り鳥。

雀のおやどはわびしいに、
ときたま機織る梭の音、
野山にとんから響きます。

雀のおやどに日が暮れりや、
ちらちら燈もともるけど、
夜更は時雨の音ばかり。

鶏爺さん

鶏爺さん、お人よし、
妻子もよう無い、親も無い。

鶏爺さん、お金無い、
鶏一羽がただ大切。

鶏爺さん、貧乏だで、
人様お畑に畑うちに。

鶏爺さん、さびしいで、
鶏ふところ入れてゆく、

鶏爺さん、草取れば、
鶏やそこらを遊んでる、

鶏爺さん、日が暮れりや、
鶏ふところ入れて去の。

鶏爺さん、住む家は、

ちよんぼりお孤のあばら屋根。

鶏爺さん、ねむれない、
鶏かかへて、雨もりに。

鶏爺さん、どうなさる、
鶏や卵も生みやせぬに。

鶏爺さん、鶏と、
朝から晩まで眺めてる。

魔法つかひ

不思議な魔法をつかひます。
みんなが知つてる魔法です。
知つてて、知らない魔法です。

牡丹の枯木でございます。
これを太陽で照しましよ。
一、二、三、
それそれ、牡丹の花が咲きました。

お父さんとお母さんでございます。
これを仲よくいたしましよ。
一、二、三、
それそれ、赤ちやんができました。
林檎のお種でございます。
これを畑で肥しましよ。
一、二、三、
それそれ、林檎が生りました。

鯡の卵でございます。
そつと、淡水でかへしましよ。
一、二、三、
それそれ、赤い鯡になりました。
針と小刀でございます。
これに磁石をあててましよ。
一、二、三、
それそれ、針と小刀と吸ひました。
濁つた泥水でございます。

これをランビキで熱しましよ。
一、二、三、
それそれ、きれいな清水ができました。
暗い電燈でございます。
ちよいと、スキツチをひねりましよ。
一、二、三、
それそれ、灯がつきました。
みんな赤ちやんでございます。
白髪になるまで待つてましよ。

一、二、三、
それそれ、みんなが死にました。
これが魔法でございます。
ほんとに不思議でございましよ。
不思議でほんとでございましよ。

和蘭陀船

（手まりうた）

一つ、肥前の長崎に、
阿蘭陀船が舞ひ込んだ、
舞ひ込んだ。

二つ、不思議な切支丹、
伴天連尊者が御土産は、
御土産は。

三つ、聖礫、デウスさま、
おん母マリヤの觀世音、
觀世音。

四つ、よい御子、神の御子、
洗禮なさるはヨハネさま。
ヨハネさま。

五つ、イエス・キリストス、
南無や波羅葦僧善主麿

善主鷹。

六つ、廐のまぐさ桶、
聖廟は猶太のエルサレム、
エルサレム。

七つ、南蠻、瓜哇過ぎて、
呂宋、澳門、平戸灘、
平戸灘。

八つ、病にや蘭法醫、

解剖のお書物、麻睡藥、
麻睡藥。

九つ、コンダツ、顯微鏡、
寫眞に油繪、砂時計、
砂時計。

十、遠眼鏡、エレキテル、
幻燈に、羅面琴、オルゴオル、
オルゴオル。

みんな揃へて、
紅髯加比丹が、
紅髯加比丹が、
ジヤガタラくろんぼを喇叭で呼びあつめ、
アラ、ラル、ラル、ラ、
ホラ、ラル、ラル、ラ、
珍妙珍妙、酢酡のお酒でひとをどり、
ホラ、ラル、ラル、ラル、ラ、
まづまづ一船あけました。

註。「南無や波羅葦僧善主麿」は天主教のお祈りの言葉です。御念佛や御題目のやうなものです。「コンダツ」はお珠數のことです。

陽炎

かげろふ、かげろふ、
何してる。
ちらちら、菫をさがしてる。
かげろふ、かげろふ、
何してる。
むじなのお宿をのぞいてる。

お月見

乳いろお月さま、朝の月、
小山羊が、めうめう、乳のみに。

空いろお月さま　晝の月、
蝶々がひらひら、繭を出た。

萠黄のお月さま、一重暈、
蛙が、ころころ、ラムネ喫む。

桃いろお月さま、合歡の月、
お鳩が、ほろほろ、ねんねした。

樺いろお月さま、十三夜、
狐が、きよろきよろ、骨盗りに。

肉いろお月さま、望の月、
啄木鳥、こつこつ、印形彫る。

金いろお月さま、二十日月、

梟が、ごろすけ、鼻眼鏡。
緑のお月さま、闇の中、
蝸牛、こそこそ、角研いだ。

小鳥の歌ひ手

小鳥の歌ひ手かぎりない。
花園鳥、獨唱の鳥、
いつも葉蔭にかくれてて、
日がな鳴き鳴き餌をさがす。

夜の明け明けに鳴く鳥は、
それは眞冬の黒鶫、
林檎畠の雪空に、

聲はつめたく翔ります。

合唱組では紅雀。
秋は薊の實を食べに、
群れ群れさへづる金翔雀、
蠟嘴は牧場の歌ひ鳥。

鶸の鳴くこゑきくときは
なぜか小春は泣かれます。
籬雀も駒鳥も
紅いもみぢにしぐれます。

春のはじめのみそさざい
いつも枯枝くぐつてる。
棘小藪の煤け鳥、
黑鶫は潜り鳥。

萠黃月夜の巢の中に
卵かへして鳴くこゑは
夜の鶯、夢見鳥。
雛に餌をやる川鳥。

氣がるな雲雀、空の鳥、
目白、頬白、とりどりに、
鳴いてさへづる晝の鳥、
樂しい樂しい歌ひ鳥。

ちんちん千鳥

赤い鳥小鳥

赤い鳥、小鳥、
なぜなぜ赤い。
赤い實をたべた。
白い鳥、小鳥。

なぜなぜ白い。
白い實をたべた。
青い鳥、小鳥。
なぜなぜ青い。
青い實をたべた。